

IV なぜ、コレが嫌われるのか

1. 「つまんねえよ」と視聴者は言う

「下ネタ」「イジメや差別」の項に挙げられたような事例は、かつてなら収録や編集の段階で「つまんねえよ」のひと言で一蹴されていたのではないだろうか。

このぞんざいな物言いは、前の方で紹介した本にあった言葉の拝借なので、悪しからず。昔、バラエティーは、あまたの制作者や放送作家や出演者がよってたかって競い合い、夢中で作っていたが、誰かの「つまんねえよ」のひと言で、多くの関係者が自信を失い、脱落していった、という話のなかで出てきた台詞だった。

「下ネタ」は、たしかに、時と場合によっては面白い。けれども視聴者は、それは公衆の面前でやってみせることでもなければ、面白がるものでもないことを知っている。ましてそれをテレビでやって、子供に見せるのはいかがなものか、無理して見せるのは、大人としてみっともない、と言っているのである。

「イジメや差別」もそうである。

いまどき顔が黒いといって囁き立てたり、イジメまがい、セクハラまがいの台詞やアクションで笑いを取ろうなんて大人げないし、みっともないし、そもそも芸がない、と視聴者は見抜いている。

経済も政治も文化もグローバル化し、日々、人種・民族・宗教による差別が紛争や戦争まで引き起こしている世界の現実がいやでも目につく昨今、相変わらずローカルに閉じこもり、ちまちまはしゃいでいるのは、いまやこの種のバラエティーだけじゃないかと憐れんでいる気配すら、ここにはある。

はっきり言って、遅れているのである。
イジメや差別は昔もあったし、いまもある。それがいいというわけではないが、シチュエーションも手口も、現実の方がもっと生々しく、ずっと先にいっている。そのことの深刻さを知っている視聴者には、画面のなかの出演者がままごとをやっているようにしか見えないし、あるいは深刻な現実に単に追随しているようすら感じてしまう。

「内輪話や仲間内のバカ騒ぎ」となると、そんなの、ウチで勝手にやってください、テレビでやらなくていいです、と突き放している。ここでも、どうせ打ち合わせ済みだとしても、大の大人がガキっぽいイジ



メまがいのドタバタを演じてみせることもあって、そういうどれもこれもが、幼稚、たわいない、みつともない……。

これもまた、古いのである。いまだにそんなことを面白いと思うセンスでバラエティを作り、出演しているのか、ということである。

画面のなかのはしゃぎ廻りに、視聴者は全然加わっていない。加わる意思がない、というより、そもそも最初から番組の仕掛けや演出やネタが視聴者がノれないものになっていて、さらに悪いことに、そのことに制作者が全然気がついていないらしい「鈍感さ」が画面から漂ってくる。

嫌う、もさることながら、視聴者はここでは、呆れている。

これらが総じて、「つまんねえよ」である。

と、こう書くと、現場方面から「そんなことを言われても、数字（視聴率）は取つてるんだよっ」というムキになった反論がもどってきそうだ。

ごもっとも、である。だが、いま問題にしているのは量ではなく、質である。とりあえずここでは、ここに挙げたようなバラエティーをつまらないと感じる視聴者意見が少くないという事実を押さえておこう。このあたりのノレなさ加減のことは、もう少しあとで再び取り上げてみたいと思う。

かつて送り手のあいだで、もっと面白く、もっと毒を、もっと悪所を、と切磋琢磨し合うなかで吐かれた言葉が、いま視聴者から、上記の各種バラエティーに向かって、けっこう頻繁に使われている。はっきりいってこれはレッドカード、即退場である。

なぜこんなことが起こっているのだろう。

*

いやいや、そんなにムクれないでよ～。

何度も言うようだけど、これは視聴者意見であると同時に、先ほど来、参考にしている『テレビ作家たちの50年』で、バラエティー制作のベテランたちも言っていることなんだから。

そこに少しばかり委員会が手を加え、ズラしたり、誇張したり、単純化して、わかりやすくしただけの話。いつもバラエティーがやっていることです。

それにしても上で見た各種バラエティーには、いろんなタイトルがついている。芸能バラエティー、クイズ・バラエティー、トーク・バラエティー、アイドルタレント・バラエティー、情報整理バラエティー、ニュース・バラエティー……。

次々に新形式や新ジャンルを開拓し、創造と破壊を繰り返すバラエティーの伝統はいまだ健在らしい。けれども、私たちの理解するところでは、制作者が新しい形式を考案するとは、これまでとはちがう切り口と内容で視聴者の情動を刺激し、従来にはなかった共感を作り出すことであり、いわば新しい「窓」を開くようなものであろう。



むろんそれには、カタチばかりでなく、内容も考えなければならない。いや、先人たちの話では、中身こそ命だった。彼らは景気づけのウソを承知で、「ギャグ1本100万円！」のエサに釣られ、無我夢中で脂汗をかき、知恵と悪知恵の両方を絞るようにしてバラエティーの中身を考えた。中身を考えることが、カタチを作ることであり、それが「作り込む」という言葉の意味だった。

ところが、それがいま、視聴者からの「つまんねえよ」の連発で、突き放されてしまうとは、どういうことか。せっかく考えた形式、一生懸命開いた窓の向こうに視聴者がいなくて、その窓ガラスに仲間内ではしゃぎ廻る制作と出演者自身の姿が映っているだけ。窓のはずが、単なる「鏡」になっているようなことはないだろうか。

あるいはひょっとして、制作者は、形式は考えた、あとはたくさん集めたタレントや芸人やアイドルのアドリブと瞬間芸、はしゃぎぶりとノリのよさ、才能と才覚にお任せ、ということなのだろうか。

それだけのことなら、バラエティーが昨今の制作コスト削減、お手軽・安上がり番組の尖兵に使われている、というにすぎないのであるまい。

*

いやー、ごめんごめん。きついこと言っちゃった。

だって、これってバラエティーだからさ。

うん、検証バラエティー。

2. 視聴者は素人ではない

つづいて、「制作の手の内がバレバレのもの」である。

内閣府の調査によれば、日本のビデオカメラの世帯普及率は4割を超えており（08年3月現在）。最近では、たいていのデジカメに動画撮影機能が付属している。同じ機能は携帯電話にもある。動いている被写体を動いたまま撮影し、同時にその場の音声を収録する行為は、いまや珍しいことでも何でもない。

ここから先、パソコンを使い、ストーリーに沿って撮影素材を編集し、そこにブツ撮りや資料撮りした映像を挿入し、ナレーションやスーパー、音楽や効果音をつけ、おしまいにスタッフロールを入れて、作品として完成させることまでやる人もけっこいい。そのためのPCソフトも安価で出回っている。動画投稿サイトには手の込ん

だ編集をした作品がゴマンとある。

そこまでやらないまでも、街角にも車内にもさまざまな映像があふれ返っている世の中である。たえず私たちはリアルとバーチャルの境目を、無意識のうちに意識しながら（！）暮らしている。いまどきの視聴者なら、番組がおおよそどういうカラクリで作られているかの見当くらいはつけられる。

これは、映像を見る人々の意識に変化が起きている、ということである。手近な道具によって撮影や編集という行為に少し慣れた人であれば、何が事実であり、何が加工によって可能になった映像かを体験的に知っている。番組の都合で事実に手を加えたり、ごまかしたりすれば、たちまち見抜くだろう。内容に引き込まれない番組を見ているときほど、制作の手の内が透けて見えててしまう。

*

もし視聴者が、そこそこ英語のできる人だとしたら、どうだろう。いまどき、そういう人は全然珍しくない。英語教育の開始が低年齢化している近年、その層はますます広がっている。中国語、ハングル、スペイン語、フランス語の達人もたくさんいるし、マイナー言語を得意とし、勉強している人たちもいる。

字幕スーパーではごまかせない。番組を面白くするために極端な意訳をすれば、即座に誤訳だと言われてしまう。捏造と批判されても、言い訳が立たない。

また視聴者が、何かの専門家や業界人だったら、どうだろうか。ある分野や趣味のマニアだったら、どうだろうか。

経済が高度に発達し、情報化が進展した社会では、誰もが何かのプロやマニアや事情通として暮らしている。政治や経済や法律のプロ。金融やマネーゲームや貿易のプロ。学問や技術や製造のプロ。都市計画や不動産や建築のプロ。商業や農業や漁業のプロ。スポーツや文化や教育のプロ。ファンションやグルメやインテリアのプロ。国際問題や環境問題や社会問題のプロ。遊びや家事や消費もそれ自体、立派なプロとして成り立っている。

何かの専門家、あるいはマニア、あるいは事情通——そういう自負がなければ、誰にとってもこの世の中は面白くないし、やってもいけない。そのくらいの覚悟と真剣さで、一人ひとりの生活者は生きている。

世の中には、視聴者一般がいるのではない。一人ひとりが何かのプロ、マニア、事情通として暮らしていく、たまたまある時間、テレビをつけ、バラエティー番組を見



て、視聴者になる。そのとき自分の仕事、馴染んでいる世界、よく知っているジャンルのことが出でてくれれば、じっと目を凝らして見るだろう。

*

こういう視聴者に比べて、放送界で働いている人、番組制作者はいったい何のプロということになるだろうか。もちろん放送と番組制作のプロである。だが、いちばんよく知っている業界をテーマに番組を作ることはめったにない。たとえ作っても、そろはっかりやるわけにもいかない。

バラエティーは、諸事万般、森羅万象、何でもありの番組スタイルである。しかし、制作者は何を取り上げても、その分野、その歴史、その事象について、専門家でもなければ、当事者でもない。はつきり言って、企画立案の当初は誰もが素人である。

バラエティーに限らない。マスメディアで働くということは、取り上げるテーマについて、いつでもゼロから始めるということである。いろいろ読んだり見たり調べたりし、当事者や関係者や専門家の話を聞き、それらをもとに自分で考え、行きつ戻りつしながら組み立てていき、番組や記事や作品としてアウトプットする。

この最後の段階に至ってようやく、制作者はプロのレベルに近づく。そのために必死で調べ、勉強する。この繰り返しが、知識や経験として蓄積され、カンやセンスとして磨かれ、構成力や表現力として鍛えられていく。

であってもなお、自分は何のプロでもないし、当事者でもない、という自覚は失ってはならないものではないだろうか。そうでなければ悪ズレし、傲慢になって、それこそバラエティーが揶揄し、笑いのめす類の嫌味な性格になってしまふ。

ともあれこうして、さまざまな試行錯誤と試練と努力を経て表現したものが、プロやマニアや事情通の目にさらされる。専門家の目にさらされても、耐えられる中身になっているかどうか。マニアや事情通が見ても、「なるほど、こうきたか」と唸らせることができるかどうか。制作者の腕はそこにかかっている。

*

バラエティーと、同じことである。

事実の間違い、ごまかし、ご都合主義の辻褄合わせは、たちまち視聴者に、つまりは各分野それにいるプロやマニアや事情通の視聴者に見透かされてしまう。面白さとわかりやすさはバラエティーが目指すべき絶対の価値ではあるが、そのための誇張・単純化・省略の仕方についても、視聴者は、送り手の理解力や表現力やセンスの善し悪しとして、敏感に読み取っていくだろう。

視聴者に、「この番組、この制作者の程度はこんなもんか」と見抜かれること、「なんだ、テレビなんて、ズブの素人が作ってるだけか」と見透かされてしまうこと。

きっと最大のバレバレは、これである。これこそいちばん避けなければならない事態であろう。

3. 生きることの基本を粗末に扱う、とはどういうことか

さて、次である。

これは厄介だ。

前にも言ったように、「生きることの基本」なんて人さまざまだから、委員会が議論したことを説明するのも手間がかかるし、バラエティー制作者にしてみれば、「何を粗末にしたら嫌われるか、具体的に言ってよ」と、ちょっと突っかかりたくもなるだろう。

先に例に挙げた視聴者意見をもう少し一般化して書き換えてみると、次のようになる。

- ・死を安直に扱うこと。
- ・食べ物を粗末にすること。
- ・社会生活の最低限のルールを破って平気なこと。
- ・自然を壊したり、動物を虐待すること。
- ・弱い人、気の毒な人たちをいたぶること。
- ・歴史の基本的知識や認識をないがしろにすること。

等々。

ここに挙げたのはサンプルであって、これがすべてというわけではない。言い方もさまざまなら、対象とする番組も、指摘する角度もちがう。意見を寄せた視聴者の年齢層も地域も性別もいろいろである。

ますますわからない？

いや、私たちも議論しながら、昔も視聴者の眉をひそめさせたり、鬱憤を買ったバラエティーというのは、食べ物を投げたり、踏みつけたりしていたし、他人の迷惑も考えず、習慣やルールをぶち壊したりしていたなア、と思い出していた。それらの番組はけっこうそれで話題となり、人気を得ていた。

ところが、いまそれと同じことをやると、視聴者には嫌われるというのはどういうことだろうか。昔と現在のあいだで、何が起きたのか。

4. 昔、バラエティーは何を笑っていたのか

温故知新。

言わずもがな、かもしれないが、確認しておきたい。

たしかに昔も、「公序良俗に反している」「子供に悪影響を与える」「日本語が乱れる」等々と批判され、やり玉に挙がったバラエティーは少なくなかった。民放連の「放送基準」が、「あれをやっちゃいけない」「これに注意しなさい」とこまごま記しているのも、言ってみれば、その善後策の足跡のようなものかもしれない。

生きている人間を死んだことにして笑い飛ばすネタも、もちろんあった。しかし、それが笑いを取ったのは、相手が権威や権力の権化のような人物だったり、やたら学歴や肩書きをひけらかす嫌味なヤツだったり、家父長制度を嵩に着て威張り散らすオヤジだったりしたからではなかったか。彼らは脂ぎった俗世間のシンボルだった。

パイ投げや小麦粉かけやビールかけが面白かったのも、材料の意外性や、ぶつけられ、真っ白になり、びしょ濡れになった人物の人格が豹変することが面白かつただけでなく、その一瞬の光景に、その人物がしがみついていた社会通念や秩序の崩壊が垣間見え、それが視聴者に快哉を叫ばせたからでもあった。

ルール破り、捷破りにも、さしたる根拠もないまま幅をきかせていました世の中の約束事の無意味さを白日の下にさらす意義があったはずである。その意味がなくなると、おバカキャラは、ただの本当のバカ丸出しにしか見えなくなる。

*

少し前で、「イジメや差別」について、簡単に触れた。

かつて身体や性格や社会的立場の特徴をからかったり、ときには責め立てことで笑いを取ることが可能だったのは、トリックスターや道化役もまた共同体の大切な一員であり、それなしには共同体のダイナミズムが失われてしまう、ということを世の中が暗黙のうちに了解していたからではなかったろうか。

そういう了解のあるところでは、笑った者が瞬間に笑われる立場に転がり落ちる逆転も可能となって、笑いはいっそう複雑化し、大人の笑いになった。

ところが、共同体のまとまりが崩れ、その了解が薄れてしまえば、それは単なる弱い者イジメにしか見えなくなる。逆転も起こらず、乱暴者は乱暴者のままである。たとえ互いに打ち合わせ済みのドタバタであっても、視聴者は、そこに弱い者イジメの陰湿さと、イジメる側の貧相な精神を読み取ってしまう。

問題は、制作者たちがこの間に起きた世の中の変化、人々の意識の変化をどう考え、それにどのように対応しようとしているか、である。



5. 王様の笑い、庶民の笑い

笑いとは何か。笑いはどういうときに発生するのだろうか。

古来、笑いの研究はさまざまに行われてきたが、いまだ定まった定義はないらしい。親密さの表現とか、緊張の緩和とか、新旧の認識の落差から生じるとか、いろいろ言われているけれども、いずれにしてもそこにあるのは、「落差」や「ズレ」の感覚である。主体の側であれ、客体の側であれ、ある状態から別の状態への「ズレ」や「落差」が起きないと、笑いは生まれない。

これまで述べてきたことの延長で、少し図式化して言うと、既存の社会通念や秩序をおちょくり、権威や権力を笑いのめしてきたバラエティーは、庶民が「王様は裸だ！」といつて笑うような類の笑いだった。

だが、テレビの前の視聴者が爆笑、哄笑したからといって、即座に王様がいなくなつたわけではない。世の中はそれほど単純にはできていない。権威や権力は相変わらずどっしりと居づけ、人々が通念や秩序に縛られた毎日を送ることに変わりはなかった。王様を笑う「庶民の笑い」のひとつひとつは、いわば一瞬の気晴らし、あるいはふと夢見るメルヘンのようなものであった。

だからこそ、バラエティーには存在意義があったということである。いつも押さえつけられてきた庶民が高らかに笑い、深く納得することができる一時があること。それが、世の中がかろうじて健康で、元気であることの証左になる。

そうしてその一瞬が何年も、何十年も積み重なり、世の中の政治や経済や文化の民主化と二人三脚で走ってきた結果、何が起きたかといえば、少なくとも王様は、昔のような姿では存在できなくなった。理不尽な権威、うざったい社会通念、封建的な秩序、等々の前近代性は、意味を失い、後景に退いていった。

*

そして、いま。

かつての王様がいなくなってみると、王様を頂点に、良くも悪くも共同性を保っていた社会構造も解体し、人々はフラットな平面でばらばらに生きることになった。

こうした変化は一々の言葉、ひとつひとつの行為の意味も変えていく。かつての「愛のムチ」が「体罰」に、「トリックスター」が「弱者」に、「おバカキャラ」が「バカ丸出し」に転化してきた背後には、単なる受け止め方の変化にとどまらない、世の中の構造的变化がある。構造的变化が一人ひとりの受け止め方を変えてきた、と言った方が、正確かもしれない。

昔のような王様がいなくなってみる



と、庶民のなかから王様を気取る連中が出てくることがある。単に力があるだけの者、乱暴者、一時の時流に乗った者が、力の弱い者や下々の苦心惨憺ぶりを冷笑する「王様の笑い」を演じ始める。

これが、先に「イジメや差別」の項で見た陰湿な笑いである。

この冷笑はまた、もっと前の方で、世の中の閉塞感から「小さくまとまって匿名集団化しながら、少数意見や異物の排除に熱狂する」と指摘した、この時代の一定の気分とも密接に通じやすいだろう。しばしば冷笑が他者に冷たいまま熱狂し、攻撃性をむき出しにして暴走することは、幾たびか歴史が経験したことである。

いや、放送にはもっと身近な例もあった。広い意味でのバラエティー番組が集団的過熱取材や集団的過剰同調を批判されたことがある。おそらく制作者は面白く、わかりやすくと一生懸命、夢中で取材し、制作したにちがいないが、あのときみずからの内に、取材対象者を突き放し、ちょっと王様のような気分で冷笑し、断罪する気持ちがなかったか。

バラエティーが二度とこうした暴走の発火点になってほしくない。また、こんなネタを繰り返していれば、この世の中はますますぎすぎすと、生きにくくなる。数多くの視聴者意見から、そのような願いを読み取ることはできないだろうか。



*

それにしても、である。

フラットな世の中になって、本当に王様はいなくなったのだろうか。

もちろん、そんなはずはない。昔の王様は雲散霧消したかもしれないが、王様は姿形を変え、別の誰かや何かが取って代わり、相変わらず存在しつづけている。

そうでなくてどうして強欲資本主義やグローバリズムだの、エネルギー争奪や地球温暖化だの、テロや単独行動主義や王朝独裁だの、官僚主義や天下りだの、格差・派遣・リストラだの、少子化や過疎化やシャッター通りだの、DVや家庭内殺人や自殺

者3万人だのが次々と問題になるのか。なぜそのたびに世の中は縮み上がるのか。

こうしたものの背後に、あるいは根元にあって、世間と世の中と世界を采配している巨大な力は何なのか。それはひとつなのか、百なのか、千なのか。その正体をどうやって見抜き、どう名づけるのかについて、世界中の政治・経済の実務家たちとアカデミズムや芸術・文化のクリエイターらが考え、悩み、試行錯誤をつづけている。

だから、と委員会は言いたいのである。

バラエティーにはチャンスがある、と。

バラエティーは過去半世紀余、雲上の王様ばかりか、世俗にまぎれ込んだ王様まで見つけ出し、笑い飛ばしたり、面白く、わかりやすく正体を暴いて、からかってきた経験がある。その高等なノウハウを現代の王様探しに活かし、あらたな「庶民の笑い」を作り上げたら、上記各界人士を出し抜いて、はるか上をいけるかもしれない。

ちまちまと、ドメスチックなおふざけでお茶を濁している場合ではないのではなかろうか。